

題目：一般的信頼の学習に社会的統計構造が与える影響：階層ベイズ認知モデルによる検討

氏名：齋藤悠輔

指導教員：竹澤正哲

人を信頼するという行為はその潜在的なリスクにも関わらず、人間社会のいたるところで見られる。それどころか、人は素性を知らない見知らぬ他者までをも信頼してしまう。この種の信頼は、特に一般的信頼とよばれる。興味深いことに、一般的信頼の程度には社会差が存在することが知られている。人はなぜ一般的信頼を持ち、またその多様性は何によって生じているのだろうか。この問題を解明するために、山岸（1998）は信頼の解放理論を構築し、そこで従来のアプローチの1つである心理学的アプローチを反駁した。心理学的アプローチでは、信頼に値する人々に囲まれた安定した環境で人が育つことにより、人々の信頼性（すなわち、信頼に値する行動をとる傾向）を学習し、それを般化することで他者一般に対する信頼が育まれると考えている。だが山岸は、信頼性自体の日米差が実験からは示唆されていないため、単に環境を反映・般化する形で一般的信頼の日米の社会差を説明することはできないと指摘した。ところで、心理学的アプローチのような「過去に経験した個別事例を学習し、一般化する」という考え方は、階層ベイズ的な認知プロセスとして定式化することが可能である。本研究では階層ベイズ認知モデルを構築し、エージェントベースシミュレーションによって心理学的アプローチの概念的有効性を検討した。その結果、心理学的アプローチの2つの可能性が明らかとなった。研究1では、被信頼者の信頼性に差がなくとも、人々の相互作用のあり方（例えば、多くの人と少数回ずつ相互作用するか、少数の人と何度も相互作用するか）が社会によって異なる場合に、信頼者が持つ一般的信頼には差異が生じることが示唆された。研究2では、被信頼者の信頼性のポピュレーション平均が十分に高くとも、信頼性が低い集団が複数あると信頼者が認識している場合には、信頼者が一般的信頼を低く持ちうることを示唆された。以上の結果に基づけば、心理学的アプローチが提供する原理は、山岸が想定していたような他者の信頼性を単に写し取るだけのものには留まらないものである。本研究の意義は、心理学的アプローチを計算論モデルによって再検討したことにより、山岸（1998）が看過していた心理学的アプローチの可能性を提示できたことにある。